

ばってん

事務長会報第34号

平成25年10月1日

長崎県公立学校事務長会

長崎西高等学校内

〒852-8014

長崎県長崎市竹の久保町12-9

電話 (095) 861-5106



ホテル **モントール長崎**

TEL 095-822-2251
長崎市筑後町4番10号



だいじょうぶ!

会長(長崎西高等学校) 濱田 邦博

2013、今年の夏は、暑い夏でした。

7月末、「2013長崎しおかぜ総文祭総合開会式」と「パレード」に行ってきました。会場全体が、躍動感に溢れ、係の生徒も、出演する生徒も生き生きとして、これだけの式典を県下の高校生が自分たちの手で作り上げている姿に熱く感動を覚えました。ここまで長い間、陰で生徒を支えてこられた全国総文祭推進室や、各校の先生たちの御苦労は並々ならぬものだっただろうと思います。

8月には、北部九州高総体も開催され、各県で選手として戦う生徒も、本県会場でいろんな係として働く生徒たちにとっても、暑い夏だったろうと思います。

学校に長く勤務していると、一生懸命な生徒の姿に、時々、「鼻の奥の方がツーンとする」時があります。そんなことありませんか？私は、ずっとそのことが自分の仕事に対する「やりがい」を感じる大切な要因になっています。

先日、離島の学校に勤務したときの卒業生から、突然連絡がありました。島を離れ、福岡に学び、第一志望の老人福祉施設から採用通知が届き、「うれしゅうして、うれしゅうして電話したとよ!」と、言ってるケイタイに向かって、「良かったね、よくがんばったね」と言いながら、突然、鼻の奥の方がツーンとしてきます。「電話ありがとね、これからも、がんばらんばよ!」

バレーボール部だったこの子たちが、卒業記念品として贈られたばかりの体育館演台に取付けた木製校章を部活動中に割ってしまい、部員みんなで大きな涙を溢れさせながら事務室に押し寄せてきた姿が、昨日のこのようでした。責任を感じて、部員全員で謝る生徒に、「大丈夫、すぐに修理してもらうから」と話しながら、そのときも鼻の奥の方がツーンとして……。物は壊れても、子どもたちの素直な心を壊さないように、「もう、泣かんでよか、涙で河の、できよっよ!」

本校に赴任してすぐ、転任者紹介のために放送部のインタビューを受けました。

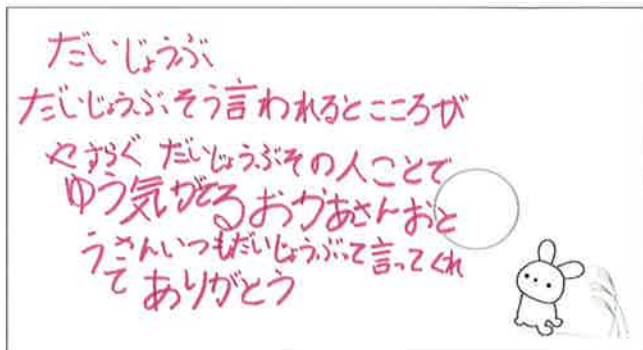
生徒から礼儀正しく質問され、ドキドキしながら一つ一つできるだけ丁寧に回答しました。その中で、前任校について質問があったので、特別支援学校の子どもたちについて少しお話をしました。数日後、今度は別の放送部員から、特別支援学校について放送コンテストアナウンス部門の題材にしたいと、何度もインタビューを受けました。手持ちの資料や前任校の創立10周年記念誌を片手に説明しましたが、自分に特

別支援教育について専門的な話ができるはずもありません。その子は、残念ながらコンテストの上位大会に進めませんでしたが、障害のある同じ世代の子どもたちの話を熱心に聞いて、自分なりにまとめ、発表したのだと思います。残念な結果を報告に来てくれた生徒の表情に、また、鼻の奥の方がツーンとしてきます。「もっと、ちゃんと調べてあげて、話せばよかったのに、ごめん」

放送部のインタビューで、前任校の生徒が作ったカレンダーに書かれた詩を見ながら、今を懸命に生きている特別支援学校の子どもたちの姿と、高校生の自分自身を照らし合わせて欲しいと話しました。みんな、誰もが、未来に夢を持って、今を大切に懸命に生きていることを知って欲しいと思って。

私自身も、毎月、このカレンダーをめくると、鼻の奥がツーンと痛み、目の縁から染み出てくる甘酸っぱいものに、いつの間にか全身を包まれてしまいます。

来月は、どんな言葉で私を励ましてくれるんだろう、癒してくれるんだろう。9月のカレンダーは「だいじょうぶ」と励ましてくれました。



(虹の原特別支援学校 田中那実さん作)

学校には、教育機関としていろいろな役割がありますが、その一つは進路保証ではないかと思っています。高等学校や特別支援学校高等部の生徒が過ごす思春期の3年間で、夢を持つ環境を提供し、それぞれの将来の夢をかなえることができるように、事務室からも見守っていきたい。そのことが、学校経営への参画に繋がるのではないのでしょうか。

近年、学校の事務室は、たいへん忙しい職場ですが、子どもたちから感動を受け取り、「やりがい」を見つければ、それなりに子どもたちのために懸命に働ける職場です。

最近、事務長会の会長が務まるのか不安になってる私にも、誰か、「だいじょうぶ」って言ってくると、心が安らぎ、その一言で勇気がでるのですが……。

「いつやるか、今たい。」

佐世保北高等学校 豊村 正博

「おはようございます」自宅から徒歩15秒のバス停で、毎日、同じ顔の近所のおばさんと挨拶をし、6時45分始発のバスに乗り込み、高校へ。この風景は、昔、経験したもの、…。そうです、高校生時の通学風景。40年ぶり。帰りは、終点でしたので、よく、運転手さんか、おばさんに起こされましたね。高校生は万年寝不足でした。オールナイトニッポンを聴き、ほくそ笑みそいはすごかと独り言を言い、東京にあこれ抱き。【日常の平穩】

定年まで数年となり、身の回りもなにかと慌ただしくなりました。長男・長女の県外就職、県外での長男の結婚、～親の思いと違っていく～、老母の足が弱り、バリアフリー化など家のリフォーム、ほんとに元気だったおばさんたちが、介護施設に入所～身近に、高齢化を感じる～、孫の誕生という明るい話題。～でも、同居ではないので身近に感じられない～【我が家もせ間の縮図】

6月沖繩で開催された事務職員協会の九州大会での研究テーマの多くは、事務職員の減少、私費会計業務の増加などで事務職員の多忙化が日常化、その解消や、事務改善の取り組みが報告されている。事務長として、現在、4か月を経過したが、たしかに文書が多い、消耗品出納簿など押印や確認ものがこれでもかと押し寄せてくる。何を、省力、省略できるか。加えて、職員の意識化を図ることができるか。【喫緊の課題】

本校の事務室はアラ4のベテランが3名なので、他の学校と比べて大変恵まれていると思う。より経験を積んでもらい、

次の学校での中軸にと。ついつい、力が入り、嫌まれ役です。先輩方は、ばしっと指導されてたなあ。まだまだ、自分は力不足。

首こり・肩こりがひどい。整形外科、マッサージ、鍼・灸、整体師、気功と、東に先生があると聞くと出向き、西にいい治療があると休んで治療を受ける。内臓疾患、歯のかみ合わせが悪いのではと診てもらっても、特に見当たらない。枕は3万円のものを買って、他にも4～5個が転がっており、家族はあきれている。最後は男の更年期障害かなとなれば、あきらめている。【しっかり、自分を受け止めること】

家事手伝いの料理編はカレー、焼きそば、お好み焼きから、中華丼、チャプチェと、家内が手がけていない料理へとレパートリーを広げている。一回、レシピを見るだけで、次回は自我流なので、量や味付けが、作り過ぎて薄味。レシピどおり、指示どおりは、どうも性に合わない。ちょっと違う食材や、味付けをやってみて、失敗を重ねる。仕事もどうも自分の土俵、自分流にしないと納得しない。だから、学校の嫌われもの。(再掲)職員の方々には悪いと思いますが、【ちょっとした抵抗】

早や4か月を経過、定例の報告、物品・小修繕の入札といった年度前半の事務処理が一段落、ゆっくり(?)とした夏と



〈ネズミ男と密談成立〉

(H24.7:水木しげるロードにて)

思っていたところ、運動場改修工事に伴う代替地確保の問題、こう買部販売員の突然の退職などで、そうは間屋が卸しません。やるのは、今しかないわけです。一回りするまで、あと半年、楽しみでもあります。

ふるさととの友

盲学校 森 美彦

私のふるさと対馬には、島の人口流出の著しい中、まだ多くの友人が生活しふるさに貢献し頑張っています。その中には、もう50年来のつき合いになる友人もいます。

その友人から先日封筒小包が届きました。中味は昔なつかしい対馬の風景画をジャケットにした1枚のCDと手紙でした。

CDのタイトルは「ふるさととの風～対馬に生まれて～」となっていました。このCDは、彼が作詞、作曲、唄とひとりで全てをこなす俗にいうシンガーソングライターとしてのデビュー作となるものです。

内容は、「自然豊かな対馬に生まれて、ここで生活できる喜び、育ててくれた両親への感謝の気持ち、身近な人との永遠の別れ、愛する家族への思いなどを詩と曲で表現しました。」と彼が言うように、ふるさと対馬の情景、そして彼のお父さん、お母さん、そして奥さんの顔を思い浮かべてしまう。こころ温まる、ほのぼののとした4曲が入っていました。

彼は、50歳を過ぎて人前でのギターの弾き語りを、そして誘われるままに作詞、作曲を始めたそうです。確かにカラオケで歌うのはグンを抜いて上手で、のど自慢などでも優勝していたし、息子の結婚式でも作詞・作曲した歌を披露していたようですが、まさかCDを制作するとはという感じでした。もともと3年後に迫った退職を記念に制作しようと準備は進めていたようですが、最近、身近な人との別れがあったり、東日本大震災の報道等に触れ、「できることは今やらんと。」という気持ちで制作を思い切ったそうです。

ふるさととの風、空、海、山、川、夕陽など自然界に対する

感謝の気持ち、そしてそこで生きていることの喜び、何よりもお父さん、お母さんを「父ちゃん、母ちゃん」と歌うことで両親への深い感謝の気持ちが素直に伝わってくるものでした。

こういう気持ちを音楽で表現できる才能を持ち合わせていることに羨ましさを感じるとともに自分にとっての「ふるさととは」を考えられる出来事でした。

しかし、このCDを何回か聴き終えて手にしながら、これを聴いた誰もが私が感じたように感じるのかと少し疑問を抱いてしまいました。

私が深く感銘できたのは、私と彼には共有した空間があり時間があり歴史があればこそなのかも知れない。また、これからの私の人生において、やはり「ふるさと」そして「家族」や「友人」の存在がますます大きなものになるであろうことに気づかせてもらったことへの感謝の気持ちからかも知れません。

ただ、もしかしらこの曲は誰が聴いてもすばらしいと思える名曲なのかも知れないのですが、…。(そうだったらゴメン。)※いずれにせよ聴かないと分からないですよ。

彼の手紙はこれからも出会う人との『縁』を大切に生きて行きたいと言う言葉で締めくくっていましたが、私が思うに彼は、出会った人そしてこれから出会う人との『絆』をも深めた「充実した人生」を送れる人だと思う。

「ふるさと」は遠くにありて時々思うのが凡人である私であり「ふるさと」にありて「ふるさと」を想うことができる彼は達人の域に達している人なのではないだろうか。

そうすると私のふるさとには多くの達人がいるということになってしまうのだが……。

CDを聴きながら、久しぶりに「ふるさと」そして「家族」「友人」を想う時間を持つことができたことを友に感謝したい。

「はやぶさ」を救ったダイオード

五島高等学校 草野 雅充

今更なんですが、数年前、日本中を熱狂させた宇宙探査機「はやぶさ」関係のDVDを2本見ました。6億キロの旅を2時間にまとめてありどちらも大変楽しめました。この二本の

作品は、登場人物の設定の違いはあるものの、共通点として取り上げられていたのが、通信不能からの復帰とイオンエンジンのクロス運転でした。通信不能からの復帰は、人の忍耐とハヤブサは設計通りに動いてくれるという信頼を描き、イオンエンジンについては、設計時の耐用年数を超えた「想定」を個人が行った事をさりげなく描いていました。

そして、そのクロス運転を可能にしたのが回路をバイパス

するために「内緒で」取り付けられていたダイオードだったんです。

この部品「ダイオード」は当初取り付けの予定は無かったのですが、「もしかしたら」とイオンエンジンのエンジニアが打ち上げ直前に基板に組み込んだとの事でした。

通信不能からの復帰は「最前を尽くすための組織としての努力」ダイオードの基板装着は「危機管理意識」の表れだと思えました。ギリギリの状況で自分たちに何が出来るのかということを考えさせられた作品たちでした。信頼とチームワーク、大事ですね。

話は変わって、今回二度目の五島高校勤務となりました。感じたことは五島は以前と変わらず美しい所だということでした。道路が整備され住みやすくなっています。そして自然の美しさは相変わらず素晴らしいです。

前は13年前、家族と一緒に引っ越しました。子供たちは小学4年生と中学1年生と難しい年頃でしたが、文句も言わず転校を我慢してくれていたようです。今思えばよい経験を

したと思っているようです。

今回、二度目の勤務で良かったと思ったことは、1から施設を覚えなくて良かったことです。担当者との打ち合わせも、スムーズに行えて余計な負担をかけずに済みますからね。

それにしても当時新築だった校舎が15年経ち、歴史を重ねた姿に感激しましたが、傷みも目立つようになって来ていますので、今後は少しでも生徒が学習しやすくなるように校舎や校地の整備をしていきたいと思っています。今後ともよろしくご指導をお願いいたします。



(平成24年10月) (東京駅にて)



(五島高校)

宇久島に赴任して

宇久高等学校 山村 智成

新任事務長として宇久高校に転勤となり、4月から宇久島に単身赴任することになりました。実は、私は単身赴任に密かな憧れを持っていました。以前福江島に勤務していたとき直属の事務長さんや近隣の学校の事務長さんも単身赴任でした。福江島は皆さんもご存知と思いますが、島内で生活する分には何も不自由を感じることはありません。当時ファミリーレストランはありませんでしたが(現在はあるそうです)ファーストフード店はあるし大きなホームセンター、コンビニもありました。スーパーも遅くまで開いているし、安売りのドラッグストアもありました。事務長さんたちは仕事が終わって部屋に戻ったら趣味など自分の時間を過ごされているようでした。当時、家内が定時制に勤務し夜は子育てに奮闘していた自分には羨ましく写っていました。

そして、ついに私も憧れの単身赴任を経験することになったのですが、ただ、ひとつ大きな誤算がありました。赴任地が宇久島だったのです。生来田舎ものの私ですから田舎の生活自体はさほど苦にもなりませんし、むしろ性にあっている部分もあるのですが、福江島で思い描いていた単身赴任生活とはかなりのギャップがありました。小さなスーパーが夜8時まで開いていますのでとりあえず買い物はできますが、あらかたの店は6時に閉まりますので物によっては仕事帰りに買い物できず休みの日まで待たねばならないことがままあ

りますし、福江島の福江市街を離れるとそうでしたが日曜日は店は休みです。そうしたなかでも特に辛いのは佐世保からのフェリーが8時過ぎに宇久島に到着するのですがその時商店はすべて閉まっていて町は真っ暗で眠りへと向かっていることです。さすがにその時は寂しさを感じてしまいます。一人だなぁと強く感じてしまうのです。しかし、逆の部分もあります。まったく知らない人に事務長さんは・・・?と突然話しかけられたりします。前任者に「あんたは知らんでも向こうはあんたのことをしっとらすけんね。住宅を一步外に出たら地域の人の目のあると思うとかんばよ。」と言われたことを思い出す瞬間です。自分の行動に責任を感じ、恐ろしさを感じることはありませんが、逆に一人ではないと言う事もできるのかもしれない。

これから、地域との繋がりを増やし、繋がりを太くすることができれば寂しさを感じることも無くなって来るのかと思います。持病があるため運動ができませんが健康のため時間を見つけて歩くようにしています。その道すがらでも地域の方に声をかけていただけるようになれば、憧れの単身赴任生活が本当に楽しい単身赴任生活になるような気がします。積極的に地域に入っていき限られた時間を楽しみ思い出にできる様心がけていきたいと考えています。



(宇久スゲ浜海水浴場)

中五島高校に赴任して

中五島高等学校 小林 英樹

昭和62年に大学を卒業後、違う職種の職業を経て平成27年4月に採用され、この4月に中五島高校に赴任しました。元来、体力勝負の仕事をしてきた自分がまさか事務の仕事をするとは夢にも思っていませんでしたし、畑違いの仕事そのものでした。初任校である佐世保工業高校定時制では、同僚のみさんには大変迷惑をかけたのでないかと今でも思っています。ただ運がよかったのは、採用から順番に収入、支出、旅費、文書、備品、給与・福利厚生、施設財産、私会計等の実務をある程度の年数させてもらえたことが今に役立っているのではないかと思います。

さて、今回の異動で初めての離島勤務になりました。居住地である奈良尾は、当然コンビニとかはなく、スーパー1件



(学校からの風景)

(他にあるかもしれませんが、まだ島内を完全に把握していない)が午後8時になると閉まってしまうため食料の調達に苦慮しています。また、4月から出張で島を離れること

が多かったため、島内の地名を聞かれてもわからないことが多々あるので、島内を回って地理の把握に努めるとともに何か趣味を持つ必要があるみたいです。釣りはしません。

本校は、昭和40年に上五島高等学校奈良尾分校・若松分校として発足し、昭和48年に両分校が統合され、中五島高校として独立し、昭和54年に若松瀬戸を望む景勝の高台に現在の校舎が竣工し、現在に至っています。平成27年度には創立50周年行事を行う予定です。生徒数は、5月1日現在139名で普通科3クラス、商業科3クラスの小規模校ですが、学校全体に活気、まとまりがあり、生徒も礼儀正しく真面目な印象を受けます。進路においては、平成24年度、就職率100%(平成24年度まで6年連続)国公立大学進学希望者も5名合格するなど実績を上げています。また部活動においても、今年度の県高総体で男子やり投げ競技で1位、2位、4位となり、長崎新聞においては「中五島飛行隊」躍進と紙面を独占しました。今後ともPTA、同窓会と連携しながら生徒をサポートしていきたいと思っています。

事務室は、事務職員1名、技師1名、業務補助職員1名と自分を含めて計4名です。

小規模校であるため、事務長も実務をする必要がありますが、その点については、3月までやっていたので、特段問題ありません。しかし事務長と呼ばれることに未だ違和感があるので、その違和感がなくなるようがんばりたいと思います。



南の風をよろしく

県教育庁 教育次長 中川 幸久

みなさんは、長崎県民歌「南の風」をご存知だろうか。学校関係者には、ずいぶん広まってきていると思うが、残念ながら県民歌なのに全県的な認知度はまだ低い。

県民歌「南の風」は、昭和36年に、8名の県民の作詞委員会で作詞が行われ、当時、長崎大学教授の山口健作氏が作曲したものである。

その後、レコードを作ることになるが、編曲は美空ひばりの「みだれ髪」で有名な船村徹氏で、歌手は若山彰氏とコロムビア・ローズが担当した。名前を聞いて、懐かしく思う人も多いことだろう。

昨年の年度当初は、このレコードが昼休みに庁内放送で流れていた。ある時、教育長が「古くさかけど、なかなかよか歌ね。ふるさと教育の一環で、学校に普及させたかね。」と、メガネの奥で、「キラリ」と目を輝かせた。こういうときは、必ず、やりなさいと言う指令でもある。私は、やりましょうと応えたものの、軍歌に聞こえるこの歌が、実際、学校になじむだろうか、と正直心配だった。

案の定、周りは、学校には合いませんよ、とほとんどの者が口を揃えた。校長会でもこの歌を紹介したら、「こいばや?」と、閉口している。“さもあらん”である。

私は、早速、教育センターの浅井係長、佐世保南高校の平瀬教諭、国見高校の野田教諭、清峰高校の森田教諭に、学校でいろんな時に使えるようにオルゴール、

吹奏楽、斉唱、行進曲の編曲をお願いした。無理なお願いに気持ちよく協力してくださった先生方に、改めて感謝の言葉を述べたい。

今年4月にCDを作成し、県下のすべての学校に配布したのは、みなさん、ご承知の通りである。

今年の高校総体、夏の高校野球の行進曲に、県民歌が流れたときは、感激で目頭が熱くなった。教育長もきっとそうだったはずである。

私は、今年1月、広島で開催された都市対抗駅伝大会(男子の部)を、現地で応援した。選手は、皆、力を見せて好成績だった。その夜、慰労会があったが、80名ほどの長崎県の応援団が集まった。

会の締めは、円陣を組んで県民歌を熱唱したのだ。長崎県を永く離れている人ほど、望郷の念が強いのだろうか。私の隣のご老人が涙ながらに大きな声で歌っている。私はその方に、近々、県民歌のCDを作り、必ずお送りしますと約束したのだった。

かつて長野県の南信地区と北信地区との分裂の危機を、県民歌「信濃の国」が救ったように、歌には、人と人を結びつける力がある。人を元気にする力がある。

来年は、いよいよがんばらんば国体、がんばらんば大会の年である。県民の一体感を醸成するためにも、今、県民歌「南の風」を我々の心の歌にしたい。県民歌の普及にみなさんのご協力をぜひお願いしたい。



編集後記

今年の夏は本当に暑かったですね。温度計も鰻登りに上昇し、場所によっては40度を超えたところもあったようです。節電慣れた身体にも少々こたえた夏でしたが、人間慣れるものですね。夏の終わりには、30度そこらでは涼しく感じるぐらいでした。(ヤセガマン?)

さて、今回、事務長会報「ばってん」の編集を初めて担当させていただきましたが、中川教育次長・濱田事務長会長はじめ、新任事務長の皆様には快く御寄稿いただきありがとうございました。担当者としてはうれしい悲鳴とっていいほど多くの原稿となり、少し文字が小さくなってしまったことが申し

訳なかったなあと感じているところです。

御寄稿いただいた皆様の思いが詰まった「ばってん34号」です。是非、隅々まで読んでいただければ幸いです。

その他、広報部では「メルマガ」でタイムリーな情報の発信も続けています。時節にあった話題の提供など随時受付けていますので、いつでも広報部へ御寄稿ください。(H・A)

